

赤田東古墳Ⅲ期

7世紀初頭前後～7世紀中葉の時期である。集落景観が一変する。まず、竪穴住居から掘立柱建物へと変化する。さらに建物群を区画する溝が認められ、調査区内ではA～Cの3区画が確認できる。ただし、この区画の位置はⅡ期の竪穴住居のまとまるグループの位置を踏襲しているように見える。ただ、竪穴住居の配置にほとんど規格性などはうかがわれなかつたが、掘立柱建物は奈良時代の官衙ほどではないものの、大体棟方向をあわせており、集落全体を貫く計画性が存在していたこともうかがえる。ちなみに区画内の大半を調査したと考えられるA区画内の建物をみると、区画の西側は棟方向を南北方向にあわせた建物4棟で構成され、東側はそれに直交する東西方向にあわせた建物3棟で構成される。東西両建物群には総柱建物が伴っている。また、建物群の中間には馬を意識的に一頭埋納した土壙も検出されている。おそらくこのような景観の区画がいくつか集まつたのがこの期の集落であったのであろう。

遺物は区画溝から多く出土しており、なかでも鉄滓やフイゴ羽口などの鉄・鉄器生産関連の遺物、製塩土器、馬の骨などは当時の手工業生産の頂点に位置づけられるものである。

(3) 吉備地域における5世紀～7世紀の集落遺跡の変遷と画期

旧国单位の備前国・備中国・美作国・備後国とは、大和に匹敵する規模の古墳を築き得た地域として吉備と呼称されていた。ここでは吉備地域の大半を占める岡山県域の発掘調査例から、5世紀～7世紀にかけての集落の変遷を復元的に追跡してみたい。そして、その変遷の画期が吉備地域の歴史的特質とどのような関係にあるのかを若干検討してみる。

1. 5世紀～6世紀初頭の集落

道口遺跡（図260-1）（正岡ほか1988）

倉敷市玉島の丘陵部に位置し、旧国单位では備中国西半に属する。一辺4mの竪穴住居1軒、掘立柱建物1棟、土壙が検出された。ただし、掘立柱建物は竪穴住居の上面が削平されたものと考えられる。そうすると約10mの間隔をあけて、竪穴住居が2軒並んでいたといえる。遺構の重複もないことから、短期間営まれた単発的な集落といえる。時期は5世紀前半である。

三手向原遺跡（図260-2）（草原2001）

岡山市三手の足守川中流域の平野部に位置し、旧国单位では備中国に属する。5世紀前半～5世紀中葉まで継続的に営まれた集落である。一辺4～5mの竪穴住居が8軒検出されているが、同時存在は2～4軒ほどで、小規模な集落であったといえる。周囲は足守川や前川などの中・小河川が合流する不安定な地形環境である。周辺には同様の小集落が点々と認められることから、5世紀になって三手向原遺跡のような小集落を中心に、本格的な開発が行われたのであろう。5世紀前半、5世紀後半～6世紀初頭、6世紀中葉の3時期の変遷がとらえられ、いずれも竪穴住居2軒が1つの単位となっている。5世紀後半～6世紀初頭の遺構面については、竪穴住居が4軒ある。広場を挟んで2軒が1単位となる竪穴住居の単位が2単位あり、全体としては径約15mの広場の周囲に円弧状に竪穴住居が並んでいる。

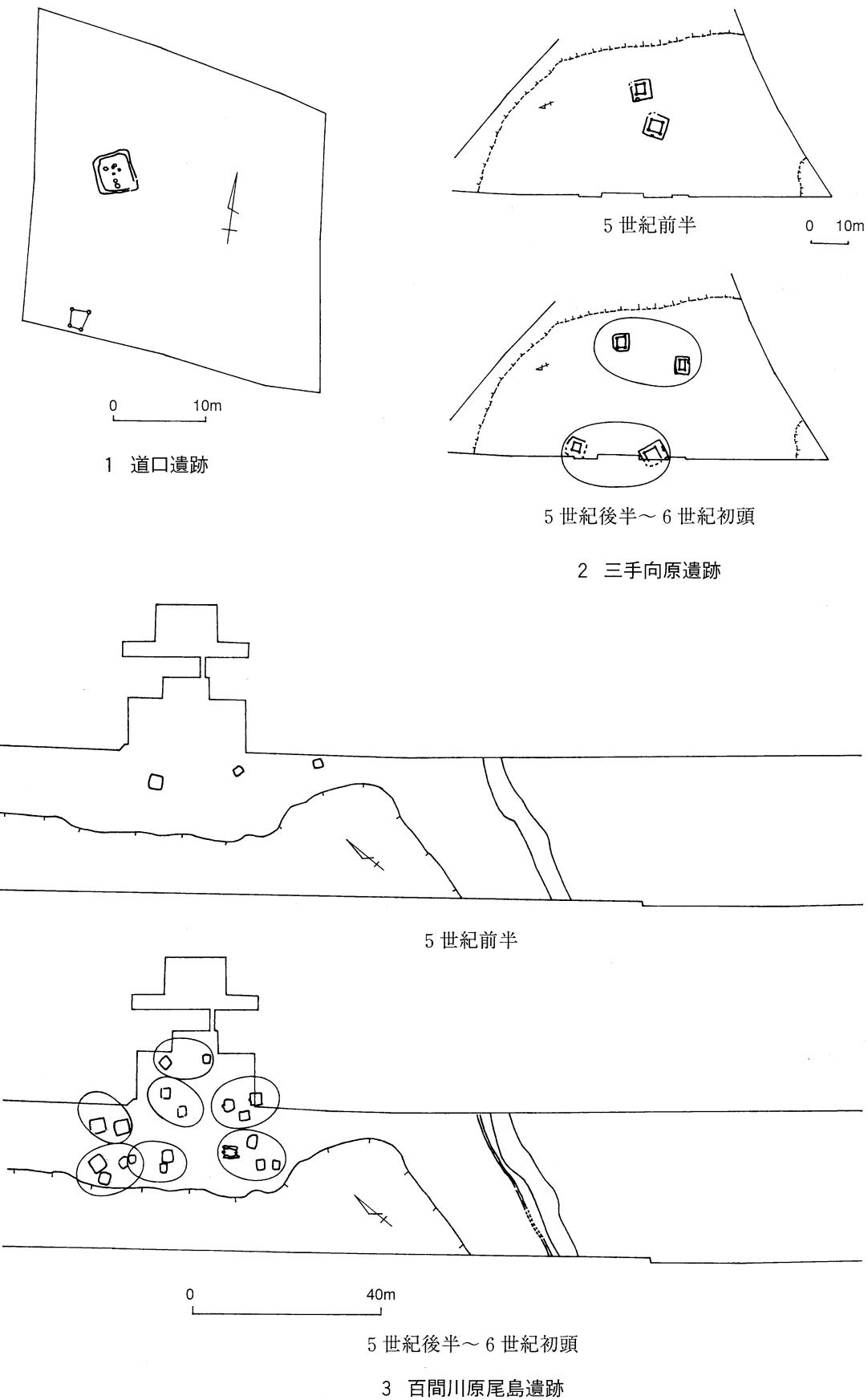


図260 5～6世紀初頭の集落(1)

百間川原尾島遺跡（図260－3）（柳瀬ほか1996）

岡山市原尾島の旭川下流域の東岸平野に位置し、旧国单位では備前国に属する。縄紋時代から遺跡の形成は行われ、弥生時代後期には当地の拠点集落の1つであったと考えられる。5世紀前半～6世紀前半にも集落が認められ、竪穴住居、掘立柱建物、井戸などが検出された。5世紀前半の集落は、一辺6mほどの中型住居1軒と一辺4m前後の小型の住居が2軒の計3軒で構成される。竪穴住居間は30mほどあり、散在的に分布している。5世紀後半～6世紀初頭になると18軒もの竪穴住居が認められる。ただしそれらは2～3軒の竪穴住居がまとまる単位が、5世紀後半と6世紀初頭の2時期にわたって存在した結果とされる。そうすると、5世紀前半の竪穴住居群はそういった単位の1つであったというよりも、間隔が30mもあいていることから、1軒が1つの単位であった可能性が高い。掘立柱建物は、3間×2間の柱間の側柱建物が1棟のみ認められる。全ての単位に付属するといったものではない。また、床面積も20m²ほどで、中型の竪穴住居の床面積よりも小さい。

正善庵遺跡（図261－4）（小郷1992）

津山市東一宮の横野川中流域の小平野部に位置し、旧国单位では美作国に属する。南北に並ぶ2つの微高地が調査されている。5世紀後半と6世紀中葉の2時期があり、北側の微高地の様相が比較的明確である。5世紀後半は一辺4m前後の竪穴住居が1軒で、周囲にはほかの竪穴住居は認められない。6世紀中葉は一辺4～6mの竪穴住居が3軒で、それぞれの竪穴住居の間には20～30mほどの間隔がある。調査区の範囲が限定的であるため、竪穴住居の周囲の様相は明確でないが、道口遺跡や三手向原遺跡のように2軒の竪穴住居が1つの単位を形成しているのではないようである。竪穴住居1軒が集落内の単位といえる。

加茂政所遺跡（図261－5）（柴田ほか1999）

岡山市加茂の足守川中流域の平野部に位置し、旧国单位では備中国に属する。弥生時代から近世までの集落遺跡で、とくに弥生時代中期から古墳時代前期の遺構密度が高い。5世紀前半の竪穴住居が6軒検出されているが、面的に調査できたのは3軒で、それぞれ20mほどの間隔をあけて点々と営まれている。竪穴住居1軒が集落を構成する単位であったといえる。

谷尻遺跡（図261－6）（高畠ほか1976）

北房町上水田の備中川南岸部の狭小な平野部に位置し、旧国单位では備中国に属する。縄紋時代からの遺物が認められるが、明確な集落が形成されるのは弥生時代中期以降である。とくに古墳時代前期の大型竪穴住居からは巴形銅器が出土しており、周囲には周溝をめぐらしていることから、該期における在地首長層の住居と推測されている。5世紀後半～6世紀初頭の竪穴住居は5軒検出されている。4軒が大体まとまる傾向があり、1つの集落といえる。しかし、そのうち3軒は20～25mほどの間隔がある。一辺が7m前後の最も規模の大きな竪穴住居と、一辺が4m前後の小型の竪穴住居が近接しており、1つの単位である可能性が高い。そうすると、竪穴住居1軒が1つの単位であるものと、複数の竪穴住居が1つの単位であるものが並存していることになり、いわばやや格差の認められる単位がまとまって集落を構成しているということになる。

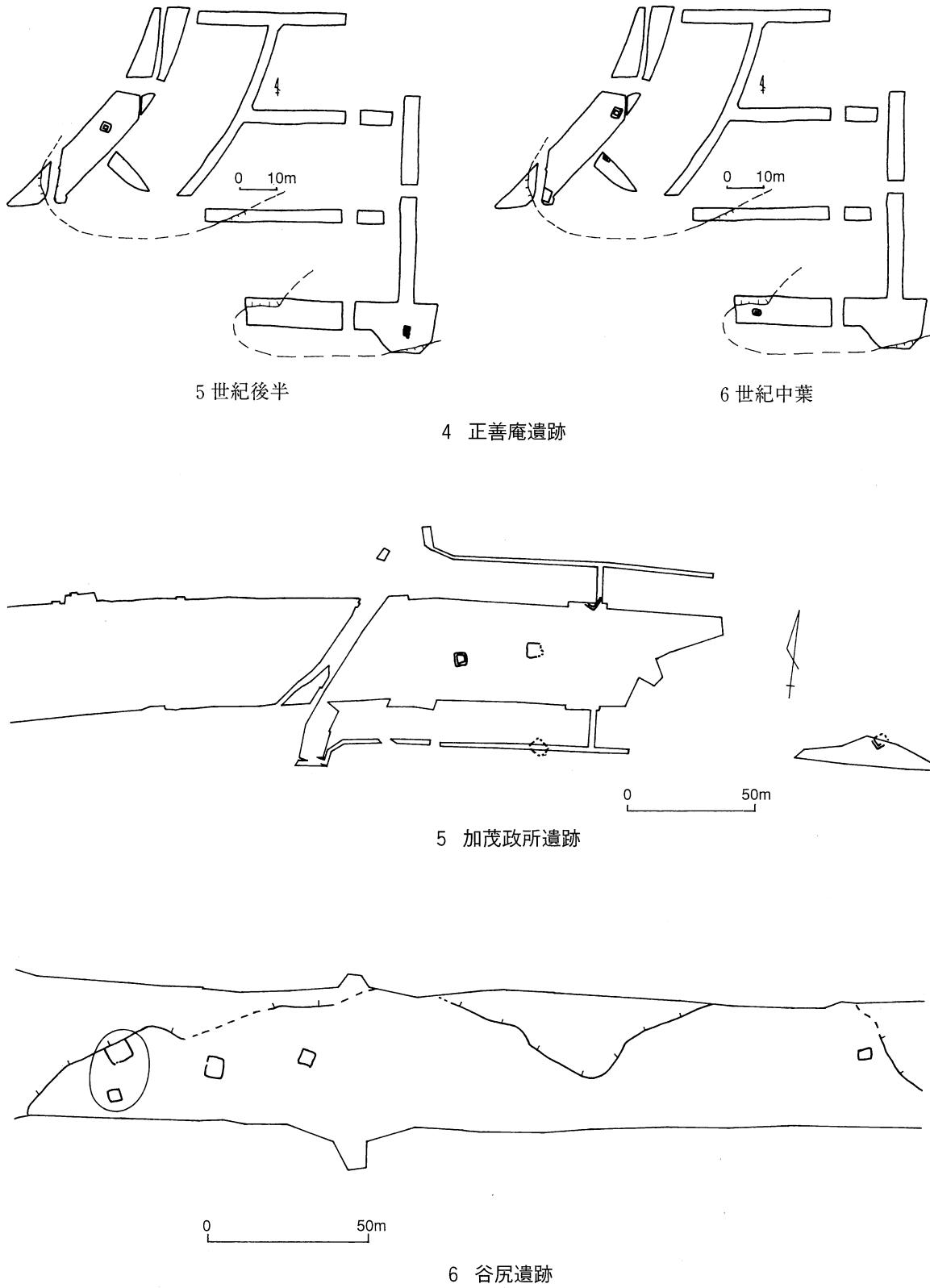
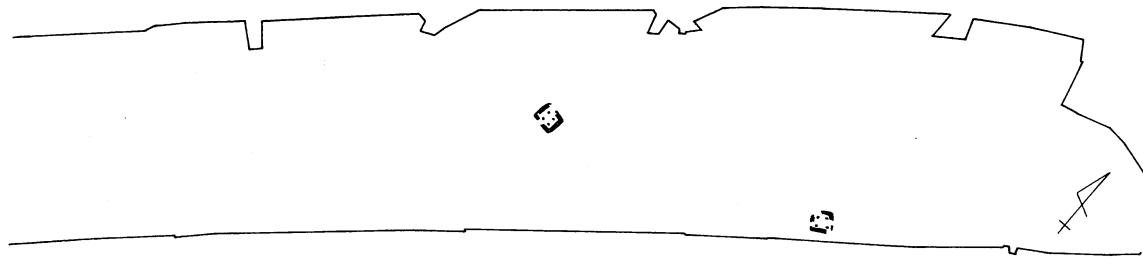
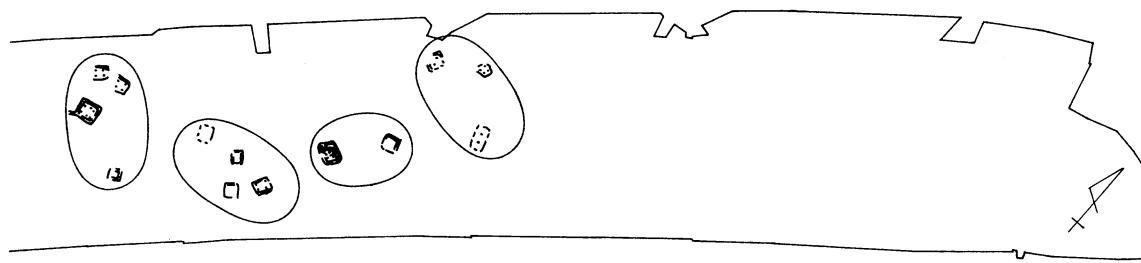


図261 5～6世紀初頭の集落(2)



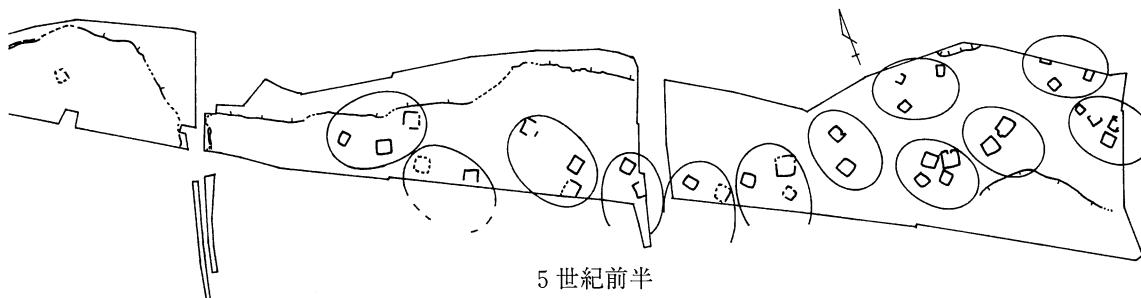
5世紀前半



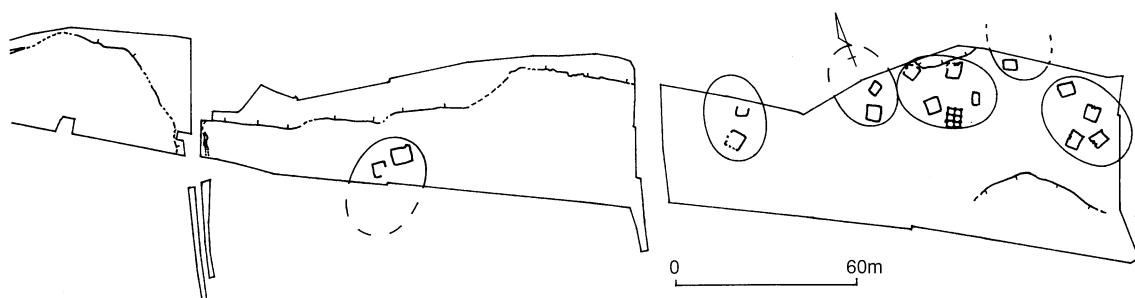
5世紀後半～6世紀初頭

0 50m

7 斎富遺跡



5世紀前半



5世紀後半～6世紀初頭

8 高塚遺跡

図262 5～6世紀初頭の集落(3)

斎富遺跡（図262-7）（下澤ほか1996）

山陽町斎富の砂川流域の平野部に位置し、旧国单位では備前国に属する。縄紋時代から中世までの集落遺跡で、とくに古墳時代中期から後期にかけては朝鮮半島系の遺物が多く出土している。5世紀前半は2軒の竪穴住居と井戸や土壙が検出されているが、2軒の竪穴住居の間には60mほどの間隔がある。これは、竪穴住居1軒が集落の単位であったことを示している。5世紀後半～6世紀初頭は竪穴住居が11軒と、周溝構造や土壙が検出されている。竪穴住居は2～4軒がまとまって1つの単位を構成しており、そういう単位が4単位検出された。そして、この4単位の竪穴住居群は、径50mほどの円形の広場を中心に、径150mほどの円弧状に並んでいるようである。

高塚遺跡（図262-8）（弘田ほか2000）

岡山市高塚、三手の足守川中流域の平野部に位置し、旧国单位では備中国に属する。弥生時代から中世の集落遺跡で、とくに弥生時代後期初頭や中葉には竪穴住居の数も多く、銅鐸や貨泉も出土していることから、該期の拠点集落の1つと考えられる。5世紀の竪穴住居も多く、韓式系土器も含まれていることから、高塚遺跡の南約1.5kmの位置にある、5世紀前半の築造と考えられる墳長350mの造山古墳との直接的な関係も想定されている。5世紀～6世紀初頭の竪穴住居は65軒が検出され、掘立柱建物も1棟検出されている。竪穴住居は5世紀前半と5世紀後半～6世紀初頭の2時期に分けられるが、掘立柱建物については出土遺物が極めて少ないとから、どちらの時期に属するか不明である。

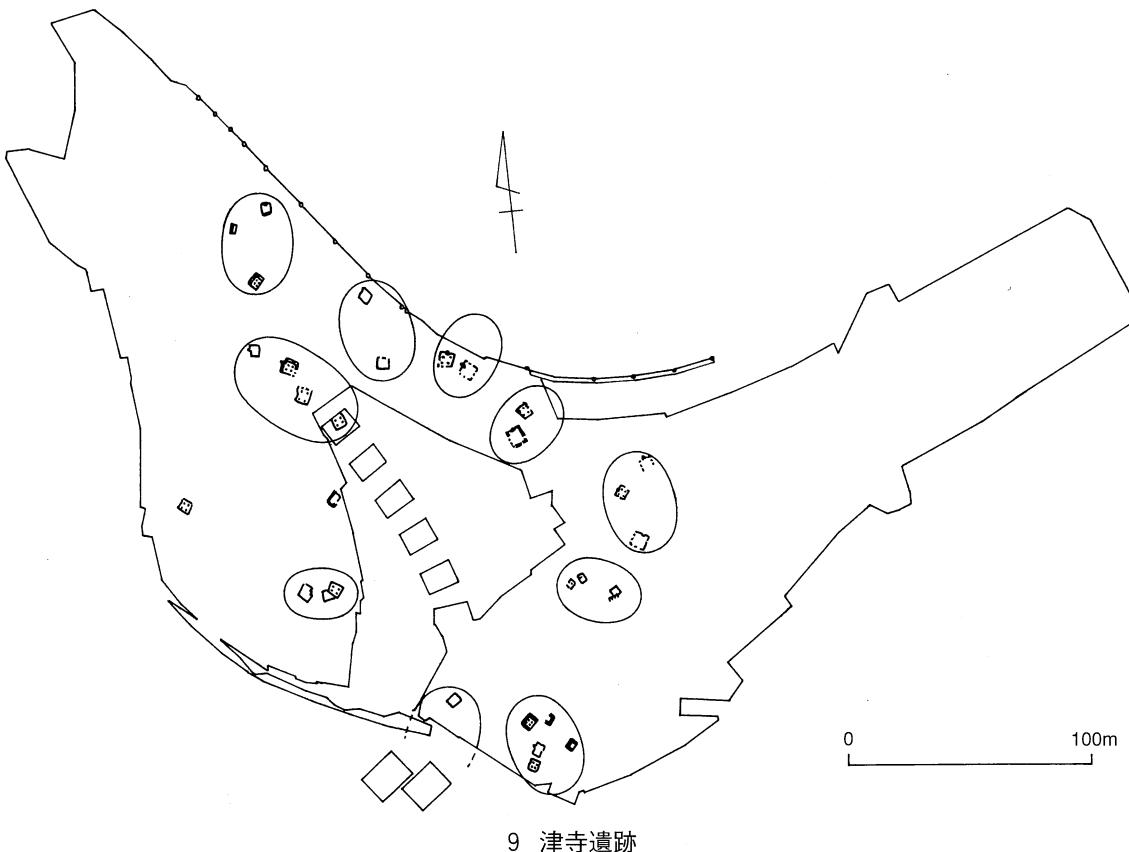


図263 5～6世紀初頭の集落(4)

5世紀前半の竪穴住居は2～4軒が1つの単位を構成し、そういう単位が8単位認められる。巨視的にみると、高塚遺跡は東西にのびる幅80mほどの微高地上に形成されており、竪穴住居群も地形に合わせて東西に並んでいる。5世紀後半～6世紀初頭になっても竪穴住居が数軒ごとにまとまる単位が認められるが、4軒以上で構成される大きな単位と、2軒ほどの小さな単位に分けられ、しかも竪穴住居の分布も調査区東半が顕著となり、大きな単位も調査区東半にまとまる。また、5世紀後半～6世紀初頭になると、複数の竪穴住居から鍛冶滓が出土するようになり、集落内で鍛冶が盛んに行われるようになったと考えられる。鍛冶滓が出土した竪穴住居は、調査区東半に集中している。この期に掘立柱建物が属するとするならば、掘立柱建物も調査区東半に属することになり、5世紀前半と比べ集落内に格差が生じてきていることがうかがわれる。

津寺遺跡（図263－9）（中野ほか1998）

岡山市津寺の足守川中流域の平野部に位置し、旧国单位では備中國に属する。弥生時代から中世の集落遺跡で、奈良時代には正方位に合わせた南北118.3m、東西89.1mの方形区画を持つ官衙が形成されている。5世紀末～6世紀初頭には、微高地全体に竪穴住居が分布する。2～5軒が1つにまとまる単位が11単位ある。それらは径約70mの広場を中心に、径約250mの範囲に弧状に並んでいるように見える。竪穴住居群は一部に重複があるものの、全体的には少ない。またフイゴ羽口が出土した土壙があるものの、鍛冶関係の遺物がとくに多いといった傾向はない。

岡山県下における5世紀前半～6世紀初頭の集落は、正善庵遺跡のように竪穴住居1軒だけのものから、高塚遺跡や津寺遺跡のように数十軒以上集まった大規模なものまである。また竪穴住居が複数検出された集落をみると、加茂政所遺跡のように竪穴住居が20mほどの間隔をあけて点々とある、いわば竪穴住居1軒が集落を構成する単位であるものと、津寺遺跡や高塚遺跡のように竪穴住居2～4軒ほどが1つの単位をなし、それらが集積して集落を形成するものがある。また谷尻遺跡のように両者がまとまって1つの集落を形成しているものもある。複数の竪穴住居がまとまる単位については、三手遺跡や谷尻遺跡のような小規模な集落の場合は2軒であるが、大規模な集落では3軒以上で構成されるものが認められる。1つの単位内において同時存在の竪穴住居を確実に同定することは困難であるが、少なくとも多くの竪穴住居で構成される単位の方が優位であったことは推測してよいと思われる。さらに5世紀後半～6世紀初頭になると、高塚遺跡ではそれまではランダムであった竪穴住居の分布に偏りが認められるようになる。竪穴住居4軒で構成される大きな単位が調査区の東半に集中し、さらにこれらの単位のなかには掘立柱建物が付属する可能性があるものもあり、集落内の単位間に格差が生じてきていることがうかがわれる。また調査区東半の竪穴住居からは鉄滓が多く出土しており、その鉄滓は鍛冶滓で、集落内で鍛冶が行われたことを示している（弘田ほか2000）。このことから集落内に生じた格差の要因の1つに鍛冶という手工業生産が関係していたといえる。

このほか竪穴住居の配列であるが、津寺遺跡や斎富遺跡のように円弧状に並ぶものと、高塚遺跡のように帯状に並ぶものがある。集落規模の小さい三手向原遺跡も円弧状であることや高塚遺跡の場合は立地している微高地の形状に規定していると考えられることから、該期の集落に定められた2つの型があったというのではなく、地形に即したためと考えられる。

以上のことまとめると、5世紀前半～6世紀初頭の集落は、集落内における竪穴住居の集積状況を指標とすると、竪穴住居1軒で集落内の単位が構成されるもの(A型)と、竪穴住居数軒で集落内の単位が構成されるもの(B型)がある。さらにB型は1つの単位が2軒のもの(B-1型)と、3軒以上のもの(B-2型)とに分けられる。大規模な集落は基本的にB型で、B-1型とB-2型が混在している場合が多い。高塚遺跡の場合、B-2型の単位を中心に鉄滓が出土しており、その差は単に住居の数だけでなく、各単位の生産活動の内容をも反映させている可能性も含まれている。

2. 6世紀中葉の集落

三手向原遺跡（図264-1）（草原2001）

6世紀初頭に続いて竪穴住居が認められる。検出された竪穴住居は2軒で、約10mの間隔をあけて並んでいる。2棟が1単位となる小規模な集落が6世紀中葉も営まれていたといえる。

百間川原尾島遺跡（図264-2）（柳瀬1996）

6世紀初頭に続いて竪穴住居が認められる。しかし、5世紀後半～6世紀初頭には複数の竪穴住居のまとまる単位が7単位も認められる中規模集落であったが、6世紀中葉には2軒だけとなる。東側に隣接する微高地にも竪穴住居が認められるが、それも1軒だけで、全体的に小規模で散在的な様相を呈する。

斎富遺跡（図264-3）（下澤ほか1996）

6世紀初頭に続いて竪穴住居が認められる。2軒前後がまとまる単位が3単位認められる。全体として中規模程度の集落であるが、単位内の竪穴住居には重複するものがある。竪穴住居のほかに掘立柱建物も認められる。竪穴住居と同様に2棟並んで1つの単位を構成しているものもある。また竪穴住居の単位に付属すると思われるものもある。しかし、6世紀後葉にも竪穴住居が認められ、また当地におけるほかの遺跡でも6世紀後葉までは竪穴住居主体で集落が構成されていることから、斎富遺跡の様相は、竪穴住居から掘立柱建物へ変換する過渡的様相とはいえない。この時期には陶質土器・陶質系土器や算盤玉形土製紡錘車などの朝鮮半島系の遺物が多く認められることから、集落内に渡来人が存在していたと考えられ、掘立柱建物もそれと関係する可能性が推測される。

窪木薬師遺跡（図264-4）（島崎ほか1993）

総社市窪木薬師の中・小河川である前川北岸の平野部に位置し、旧国単位では備中國に属する。弥生時代後期前半から中世までの集落遺跡であるが、5世紀前半～6世紀後葉には、鐵鋌や鍛冶滓などの鍛冶関係遺物や遺構が認められることから、鐵器製作集団の集落と考えられている。6世紀中葉の竪穴住居は13軒で、竪穴住居の上面が削平された結果と考えられる1間×1間の掘立柱建物も含めると17軒となる。4～6軒の竪穴住居がまとまって1つの単位となり、そういう単位が5単位ある。ただし、同じ単位内の竪穴住居は重複しており、同時に存在していたのは2軒ほどと考えられる。ほとんどの竪穴住居から鉄滓が出土しており、鐵器製作に必要な木炭を焼成したと考えられる窯も伴っている。

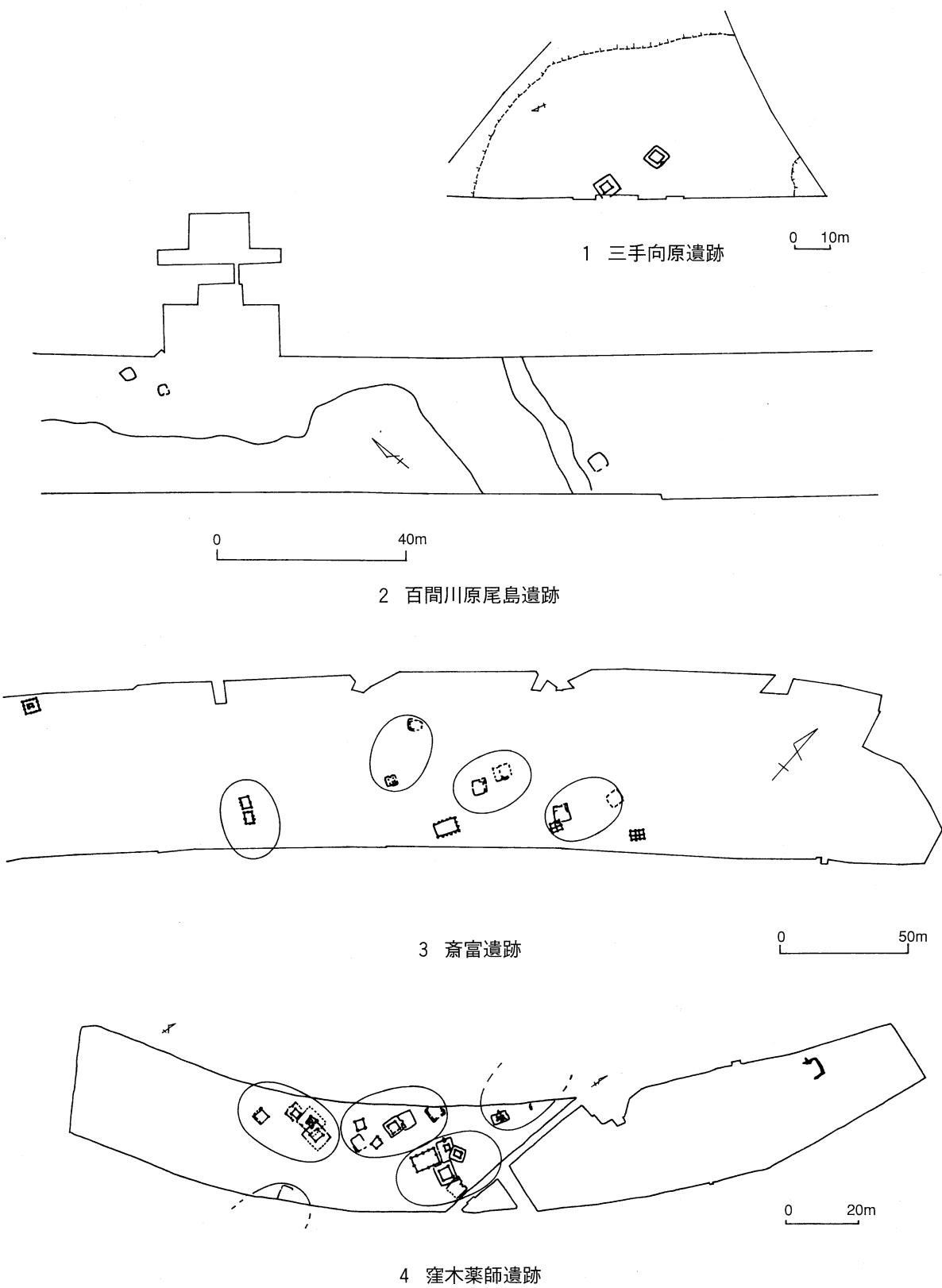


図264 6世紀中葉の集落

6世紀中葉における集落は、竪穴住居1軒が集落の基本的な単位である正善庵遺跡や百間川原尾島遺跡と、2軒が1つの単位となる三手向原遺跡や斎富遺跡、3軒以上が1つの単位をなす窪木薬師遺跡がある。竪穴住居の集積状況から、正善庵遺跡、百間川原尾島遺跡はA型、三手向原遺跡、斎富遺跡はB-1型といえる。窪木薬師遺跡は、複数の竪穴住居がいくつか集まった単位の集積によって集落が構成されているが、5世紀前半～6世紀初頭の集落とは異なり、単位内の竪穴住居が重複している。これは、個々の単位がほとんど同じ位置で建て替えを行ったことを示しており、1つの単位の安定性が増したことを示唆している。このような様相は6世紀後葉の集落になるとより顕著で、窪木薬師遺跡はその先駆的形態といえる。このような単位をC型とする。3軒以上の多くの竪穴住居が構成されるB-2型の発展した形態と考えられる。窪木薬師遺跡からは焼土壙や鉄滓などの鉄・鉄器生産に関する遺構や遺物が出土していることから、鉄・鉄器生産とC型の関係が推測させられる。いずれにせよ、6世紀中葉はC型の出現という画期が指摘される。

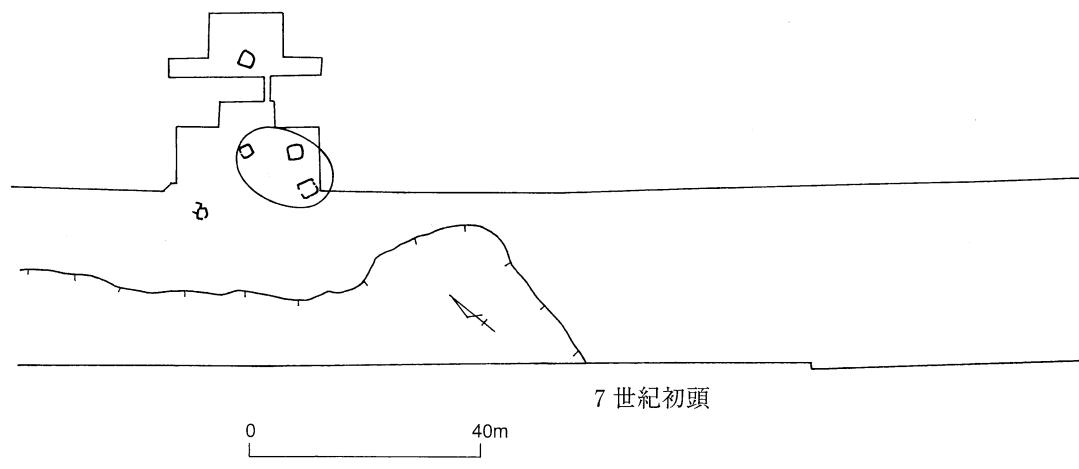
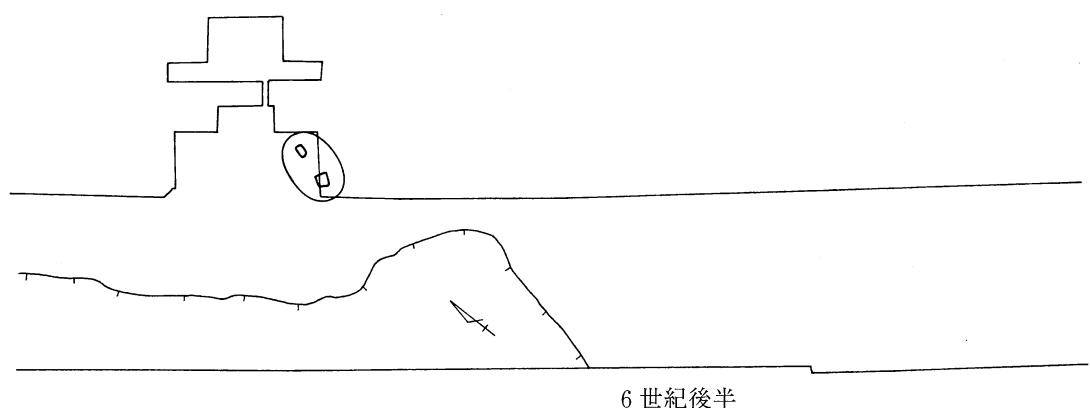
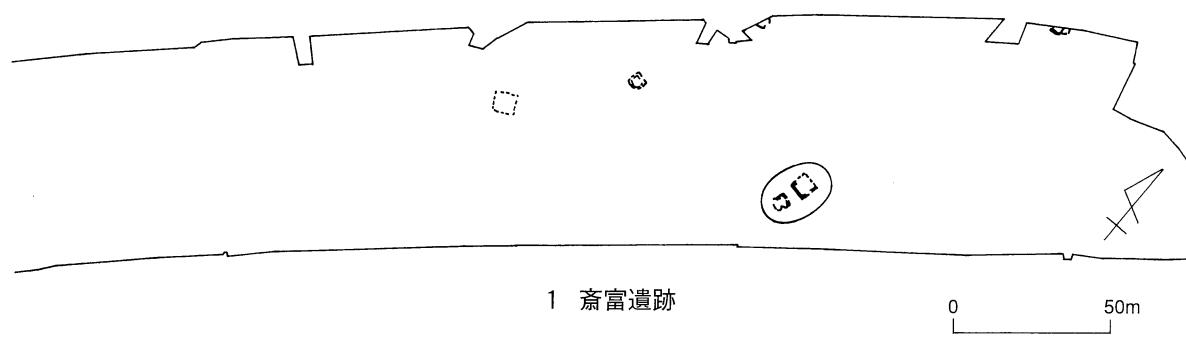
3. 6世紀後葉～7世紀初頭の集落

斎富遺跡（図265-1）（下澤ほか1996）

6世紀中葉に統いて竪穴住居が認められる。2～3軒が1つにまとまる単位が3単位認められる。竪穴住居の分布は6世紀中葉とほとんど変わらない。一方、6世紀後葉～7世紀の掘立柱建物は側柱建物と総柱建物で29棟ある。数棟の建物がまとまる単位が4～5単位認められる。それらの分布をみると、掘立柱建物のまとまる単位は竪穴住居がまとまる単位の位置と重なる。掘立柱建物と竪穴住居が並存していたのか、それとも時期差があるのかを判断することは難しい。しかし掘立柱建物は個々の小単位を越えて方向を合わせる、いわば集落全体を規定するような方向性によって分布しているが、竪穴住居には同じ単位内でも共通した方向性は認められず、整然と並ぶ掘立柱建物の様相とは対称的である。また、調査区中央付近の掘立柱建物群と竪穴住居とが極めて近接しており、両者の同時存在は不可能である。6世紀後葉の竪穴住居のまとまる単位の位置を継承しながら、6世紀末～7世紀前半の集落は掘立柱建物に変化し、しかも建物相互には方向を合わせる規定ができたと考える方が妥当と思われる。斎富遺跡では、6世紀中葉には竪穴住居と掘立柱建物がある程度並存する景観を想定した。しかしながら、6世紀後葉ではその景観は解消された可能性が高い。6世紀中葉には朝鮮半島系の遺物が多く認められることから、該期の掘立柱建物と渡来人の関係を推定したが、6世紀後葉になると朝鮮半島系の遺物が全く認められなくなる。このことは渡来人の関係がなくなったか、もしくは薄まったことを示している。そのため、集落も竪穴住居主体的一般的な集落景観になったと考えられる。

百間川原尾島遺跡（図265-2）（柳瀬ほか1996）

6世紀中葉に統いて竪穴住居が認められるが、6世紀後葉は2軒のみで6世紀中葉と同様の様相を呈する。しかし6世紀末～7世紀初頭については、竪穴住居が6軒となり、数軒の竪穴住居がまとまる単位も認められる。しかし全体としては遺構が少なく、それほど大きな集落とはいえない。一方7世紀になると掘立柱建物も数多く認められ、建物の軸線方向を指標にすると、同じ軸線方向を共有する建物群が3～4単位あり、それぞれ1単位が3～4棟の建物で構成されている。軸線方向が若干異なる建物には極めて近接しているものもあることから、両者の同時存在は難しく、単位



2 百間川原尾島遺跡

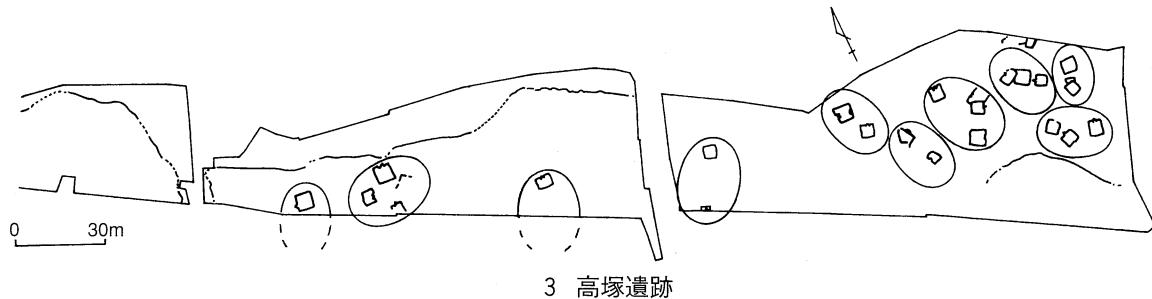


図265 6世紀後葉～7世紀初頭の集落(1)

の違いは時期差を示している可能性が高い。竪穴住居と掘立柱建物との関係については、近接していて同時存在が不可能な竪穴住居と掘立柱建物が認められる。それは該期の竪穴住居 6 軒のうち 2 軒までがそうである。また、建物の軸線方向を合わせ、整然と並ぶ掘立柱建物群と、緩やかにまとまって 1 つの単位を構成する竪穴住居とは、景観的にも対称的である。以上の点から、竪穴住居と掘立柱建物の並存関係で集落が構成されていたと考えることは難しいようと思われる。ただし 8 世紀における事例であるが、津山市一貫西遺跡(行田1990)の場合、掘立柱建物主体の集落に竪穴住居状の遺構が付属している。したがって該期の百間川原尾島遺跡も同様に、掘立柱建物主体の集落に単発的に竪穴住居が付属するという関係が考えられる。

高塚遺跡（図265-3）（弘田ほか2000）

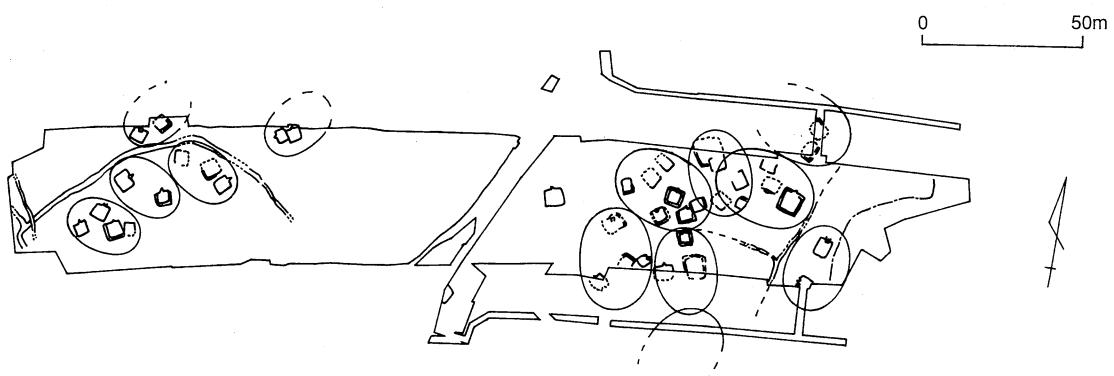
5 世紀～6 世紀初頭に続いて竪穴住居が認められるが、数は半分以下に減っている。竪穴住居は 3～4 軒以上で構成される単位と竪穴住居 1 軒のみの単位があり、前者も単位内で重複が認められるものと認められないものがある。重複の認められる単位は、調査区東側に集中しており、5 世紀～6 世紀初頭においても同様の位置に竪穴住居が集中していた。ただし、鉄滓が出土する竪穴住居は調査区西側にも認められ、集落全体で、鉄・鉄器生産を行っている様相といえる。

加茂政所遺跡（図266-4）（柴田ほか1999）

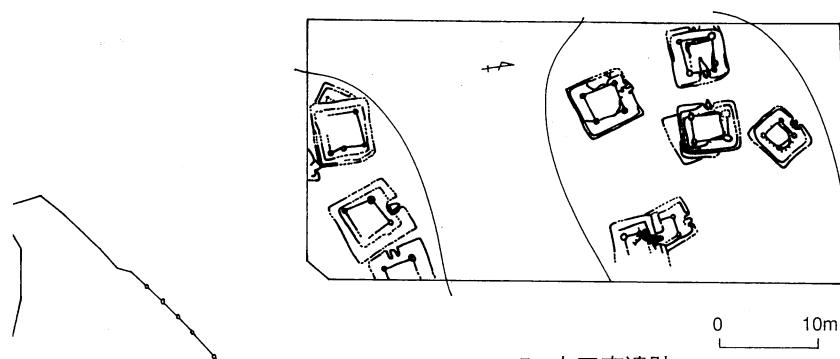
6 世紀初頭に続いて竪穴住居が認められる。以前には住居が確認されなかった低位部へも認められるようになり、全体の住居数も増加していることから、集落が著しく拡大したといえる。3～8 軒ほどの竪穴住居がまとめて 1 つの単位を形成しているものと、1 軒のみで 1 つの単位を形成しているものとがある。また整然としたものではないが、竪穴住居群を区画するためと推測される溝もある。区画の範囲については、溝が完存していないため明確でない。ただし遺構密度の薄い調査区西側でも、竪穴住居群を囲む溝が検出されている。そこでは、竪穴住居がまとまる単位を 3 単位ほど囲っている。また、単位内の竪穴住居は重複していたり、接していたりするものが少なくない。同じ位置に竪穴住居が連綿と建て替えられた結果と考えられ、より 1 つの単位が安定してきていることを示しているといえる。鉄滓を出土した竪穴住居もあり、焼成土壙や鍛冶炉も伴っていることから、鉄・鉄器生産も行っていた集落といえる。

津寺遺跡（図266-6）（中野ほか1998、亀山ほか1997）

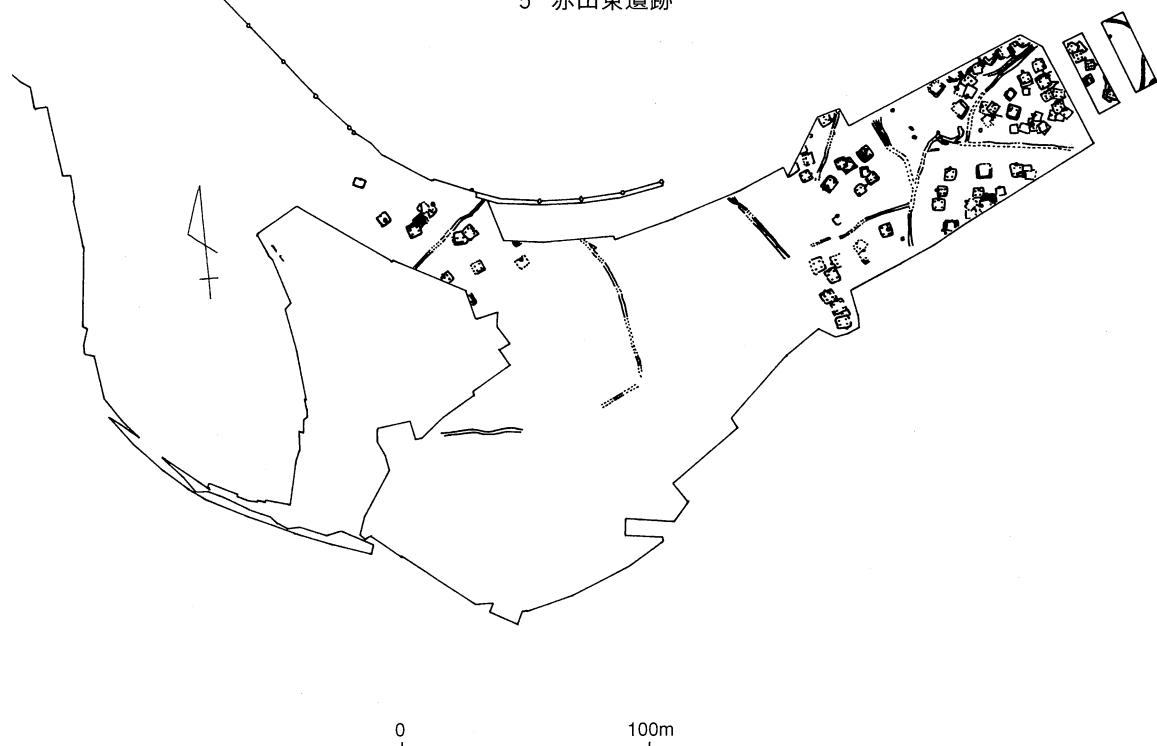
5 世紀～6 世紀初頭にかけて大規模な集落が形成されていたが、6 世紀中葉に遺構の空白期がある。しかし、6 世紀後葉～7 世紀初頭にかけて数多くの竪穴住居が認められるようになる。ただ 5 世紀～6 世紀初頭までとは異なり、集落の中心は微高地高位部よりも低位部に移る。しかも竪穴住居が重複し、密集した状況で検出される。さらに竪穴住居群を小溝によって区画している。溝で画される範囲は大体 100m 四方ほどの範囲であるが、この溝は 8 世紀以降の官衙遺跡のように整然とした方向性は有していない。竪穴住居のほかに掘立柱建物もあるが、溝で画された竪穴住居群個々に伴っている様相でもない。鉄滓や焼成土壙も多数存在していることから、集落内で鉄・鉄器生産が行われていたと考えられる。



4 加茂政所遺跡



5 赤田東遺跡



6 津寺遺跡

図266 6世紀後葉～7世紀初頭の集落(2)

6世紀後葉～7世紀初頭の集落の特徴は、1つの単位内の竪穴住居が重複するC型がかなり認められるようになることで、いずれも鉄滓などの鉄・鉄器生産関連の遺物や遺構が出土している。さらに津寺遺跡や加茂政所遺跡では、竪穴住居群をいくつかまとめて囲む溝が認められる。これをD型とする。1つの単位の占有空間を明確に区画していることや、複数の単位がまとまっていることから、C型がさらに発展した形態と考えられる。

4. 5世紀前半～7世紀初頭の集落形態

5世紀前半～7世紀初頭における吉備地域の集落遺跡を概観した。掘立柱建物も認められるが、竪穴住居が主体である。また竪穴住居が数軒の小規模な集落から、数十軒もある大規模なものまで様々な規模のものがある。それらは竪穴住居1軒、もしくは数軒がまとまる単位によって構成されているが、その単位はいくつかの型に分類できる(図267)。まず最もシンプルな単位は竪穴住居1軒である。これをA型とする。竪穴住居が2～4軒がまとまって1つの単位を形成しているものをB型とする。B型は竪穴住居2軒のものをB-1型、3軒以上のものをB-2型とする。大規模な集落にはB-2型が認められる。竪穴住居がまとまっていることについてはB型と共通するが、単位内で重複しているものをC型とする。同じ位置で重複することは、その単位がより安定してきていることを示している。C型をいくつかまとめて溝で囲ったものをD型とする。

この指標にしたがって各期の集落を分類してみると、5世紀前半～6世紀初頭の集落は、A型が集落の基礎単位となるものが多い。実例としては正善庵遺跡、5世紀前半の百間川原尾島遺跡、5世紀前半の斎富遺跡などで、これをⅠ類の集落とする。A型が主体で若干B型が認められるのは谷尻遺跡で、これをⅡ類の集落とする。B型によって構成されるものは、高塚遺跡、5世紀後半～6世紀初頭の斎富遺跡、5世紀後半～6世紀初頭の

百間川原尾島遺跡、津寺遺跡、三手向原遺跡で、これをⅢ類の集落とする。Ⅲ類の集落は数十軒の竪穴住居があり、直径250mの範囲に広がる津寺遺跡のような大規模集落から、4軒ほどの竪穴住居で直径60mほどの範囲の三手向原遺跡のような小規模なものまである。また高塚遺跡は5世紀前半と5世紀後半～6世紀初頭の2時期にわたって集落が営まれているが、5世紀前半は調査区全体に竪穴住居が認められるものの、5世紀後半～6世紀初頭には調査区の東側に偏る傾向が認められる。しかも、集中する地点の単位をみてみると、竪穴住居4軒で構成されるB-2型が多い。さらにその地点からは鉄・鉄器生産関連の遺物が多数出土している。B-1型と比べ、B-2型の方が有力な単位であると考えられることから、5世紀後半～6世紀初頭には集落内において単位間の格差が顕著になってきているといえる。そのような状況

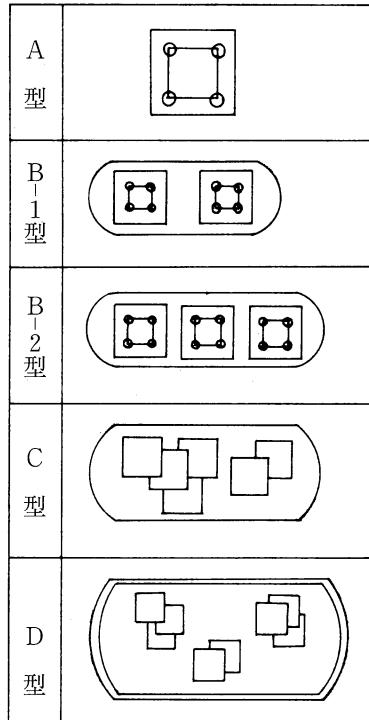


図267 5世紀前半～7世紀初頭の集落形態

の生じた要因として、鉄・鉄器生産との関係がうかがわれる。

6世紀中葉の集落例はそれほど多いとはいえないが、I類の正善庵遺跡や百間川原尾島遺跡、II類の三手向原遺跡や斎富遺跡のほかに、C型が認められる窪木薬師遺跡がある。これをIV類の集落とする。IV類の集落からは鉄・鉄器生産関連の遺物や遺構がかなり出土しており、さらに掘立柱建物が付属する単位も認められるようになる。同一地点での竪穴住居の重複は、その単位がかなり安定してきたことを示している。IV類の集落の出現は、古墳時代の集落変遷上の1つの画期といえる。そして窪木薬師遺跡の様相は、それが鉄・鉄器生産と極めて密接な関係があったことを示している。ただしその萌芽は高塚遺跡の例から、5世紀後半には認められる。

6世紀後葉～7世紀初頭の集落は、II類の斎富遺跡、III類の百間川原尾島遺跡、IV類の高塚遺跡、赤田東遺跡のほかに、D型の認められる加茂政所遺跡や津寺遺跡がある。加茂政所遺跡や津寺遺跡をV類の集落とする。溝で区画された内部の構成については、加茂政所遺跡の場合、やや遺構が少ない部分があり、そこには1つの区画内に竪穴住居がまとまる単位が3単位認められる。津寺遺跡の溝で区画される範囲については、大体100m四方程度と考えられる。この範囲は竪穴住居2～4軒で構成される単位の占有範囲からすると、かなり広い。この点からも区画されたのは1つの単位ではなく、いくつかの単位をまとめて溝で区画していたことがうかがわれる。いずれにせよ、同一単位内で竪穴住居が重複するIV・V類の集落は、集落を構成する単位が安定していることから、集落自身の規模も大きい。

つまり5世紀～7世紀初頭における竪穴住居主体の集落は、集落を構成する単位の形態によってI～V類に分けられるが、それは単位の拡大と固定化の段階を示しており、より固定化を指向する単位が時期が下るごとに出現してきているといえる。ただし6世紀後葉～7世紀初頭の集落例をみてもわかるように、様々な形態の集落があることから、集落個々をみると多様である。また当地の集落の安定と拡大には、集落内における鉄・鉄器生産が不可分に結びついていることも指摘される。

5. 一般集落と専業集落

当地域の6世紀以降の集落では、鉄・鉄器生産に関わるようになった集落が安定的に大規模な集落を形成していることを指摘した。それは具体的には同地点での竪穴住居の繁茂な建て替えによつて示されているとした。6世紀後葉になると、竪穴住居数軒の小規模な集落からも鉄滓などの鉄・鉄器生産に関わる遺物が出土するようになる。花田浩氏はこれらの集落を鉄・鉄器生産に関わる度合いからA～C類に分けた(花田1996)。そのうち鍛冶炉を持つ工房や屋外炉を中心とした建物配置が認められ、多量の鉄滓にフイゴ羽口、砥石、鍛造剥片が検出される集落を専門工人の専業集落としている。6世紀後葉～末の窪木薬師遺跡がその例とされる。窪木薬師遺跡は6世紀中葉に鉄・鉄器生産の拡大とともに、竪穴住居が同地点で重複する安定的な集落を形成している。6世紀後葉～末になると、多量に鉄滓などの遺物が出土することから、鉄・鉄器生産が飛躍的に拡大したと考えられる。一方、6世紀後葉～末の集落は、竪穴住居と掘立柱建物で構成されている(図268)。掘立柱建物と竪穴住居の関係については明確でない点も多いが、掘立柱建物が竪穴住居よりも高燥な地点を意識して立地しており、また竪穴住居とは重複しないことから同時存在で、しかも竪穴住居とは異なる立場、あるいは異なった階層の住居であったと考えられる。総柱建物の倉庫を有していることからも、竪穴住居よりも上位の住居といえる。ただ、掘立柱建物の方位が2方向あることから、

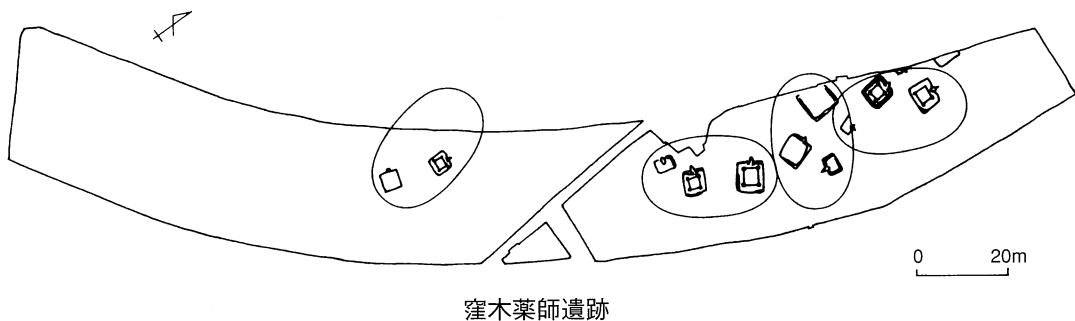


図268 鉄・鉄器生産関連集落

若干異なる時期の建物群であることも推測される。竪穴住居の分布についてみると、6世紀中葉とは様相が異なっている。一辺が6mほどの中形住居が2軒と4m×1.5mほどの小型の住居1軒がセットとなって1つの単位を形成している。そして同じ単位内の竪穴住居はカマドの方向を合わせたり、あるいは直交にするなど相互に意識して配置されていることがうかがわれる。ただ平面的にみると、近接しすぎている単位があり、検出された竪穴住居は全て同時存在とはいえない。3軒ほどの竪穴住居がセットとなる単位を位置をずらしながら建て替えた結果と考えられる。ただし、同じ単位内では住居の重複は認められない。6世紀中葉の場合は、同じ単位内の竪穴住居には重複が認められる。そうすると竪穴住居のあり方だけをみると、6世紀後葉～末は、6世紀中葉よりも集落内の単位の安定度が後退しているといえる。

窟木薬師遺跡よりも小規模ではあるが、6世紀後葉～7世紀初頭の鉄・鉄器生産と関係が深いとされる集落が県北の山間部を中心に調査されている。鉄鉱石や砂鉄を製錬するだけと考えられる遺跡では、製錬炉や炭窯は検出されるものの、それを操業していた集落は認められない。これは県南部でも同様で、次の工程である精錬鍛冶や鍛錬鍛冶を行っている場合には集落が認められる。製錬遺跡の調査例は30例を越えており、この様相はある程度普遍的と理解される。津山市大畠遺跡は鉄・鉄器生産を行っていた集落の全容がわかった調査例で、竪穴住居2軒、カマドを伴わない作業場的な竪穴住居状遺構が3軒、薪などをおく物置と推測される段状遺構が2棟で構成される(行田ほか1993)。付近には製錬炉とセットになる八ツ目うなぎと通称される炭窯もあることから、製錬→精錬鍛冶あるいは鉄器製作までを一貫しておこなっていた集落と考えられる。同様の集落例としては津山市深田河内遺跡(保田ほか1988)、大開遺跡(平岡1994)などがある。

このような単位が多数集まつた集落としては、津山市狐塚遺跡(河本1974)がある。ただし狐塚遺跡ではカマドを付属する竪穴住居は認められず、作業場的な竪穴住居状遺構と段状遺構がセットとなる単位によって構成されている。しかも遺物の構成から、精錬鍛冶から鍛錬鍛冶の各工程を地点ごとに分担していたと考えられている。住居である竪穴住居が認められない点や生産工程が整然としていることから、狐塚遺跡は集落というよりも、工房と考えた方がよい。ただ、今のところ工房については狐塚遺跡以外には同様の例が見当たらないため、より数例の増加を待って検討していく必要がある。窟木薬師遺跡の6世紀末の集落は、基本的にはカマドを持つ竪穴住居2～3軒の単位の集積で構成されていることから、大畠遺跡のような集落がいくつかまとまって集落を形成していたと考えられる。大畠遺跡のような山間部で製錬や鍛冶をおこなっている集落は、住居の重複もあまり認められないことから、比較的短期間のうちに集落地をかえていると考えられる。それは鉄・

鉄器生産によって周辺の燃料を取り尽くしたということが基本的な理由であろうが、一方でそのような不安定な集落の鉄・鉄器生産を支える保障が存在していたことも示唆している。窪木薬師遺跡の6世紀後葉～末の鉄・鉄器生産の飛躍的な拡大も同様に考えられる。それは集落内の単位の様相が6世紀中葉に比べると継続的でないことから、その保障は集落内の各単位の自立性を喪失する方向のもので、いわゆる従属的な関係の成立によって生産が拡大したと推測される。したがって、県北山間部の鉄・鉄器生産関連の集落が単発的であることも、燃料の枯渇といった現象面からの理由だけでなく、従属的な関係のもとで鉄・鉄器生産を行っていたことを示していると考えられる。

つまり、6世紀後葉～末になると従属的に鉄・鉄器生産を行う集落があらわれる。その集落はそれまでの集落と比べると、飛躍的に鉄・鉄器生産を行う反面、集落そのものの自立性や安定性は低くなる。生産効率のみを優先させた鉄・鉄器生産としては、一般集落の基本となる竪穴住居を欠落させた遺構のみで構成される、いわゆる工房といえるものであると考えられる。今のところ狐塚遺跡の1例だけであるが、当地においては、6世紀末～7世紀初頭には存在した可能性が高い。これは国衙工房などの系譜につながるものと考えられる。いずれにせよ6世紀後葉～7世紀初頭の集落には、大規模な集落であっても、その内部における竪穴住居の様相から一般的な集落と従属的な集落を分類することが可能であるし、見掛け上の遺構の多さで両者を混同してはならない。次に7世紀の集落についてみてみたい。

6. 7世紀前葉の集落

百間川原尾島遺跡（図269-2）（平井ほか1994）

7世紀前葉の竪穴住居と掘立柱建物が検出されている。しかし、6軒の竪穴住居のうち、2軒は掘立柱建物と近接しすぎることや、ほかの3軒はまとまって6世紀後葉の集落のように1つの単位を形成していることなどから、建物方向を合わせて整然と並ぶ掘立柱建物と竪穴住居が並存して集落を形成していた可能性は少ない。7世紀前葉のある段階で、掘立柱建物主体の集落に変化したといえる。建物は方位によって3群ほどに分けられる。また同一方位の建物群を囲んでいる区画溝もある。最も広く調査された区画についてみると、側柱建物4～5棟、総柱建物1～2棟で構成されている。区画溝からは鉄滓も出土している。

斎富遺跡（図269-4）（下澤ほか1996）

6世紀末～7世紀にかけては、掘立柱建物と竪穴住居が並存する集落に変化したとされる。6世紀後葉には竪穴住居が少なくなるが、それについては集落が縮小したのではなく、補完的に掘立柱建物が用いられたためとされる。掘立柱建物は建物の方向と柱穴の出土遺物から、6世紀後葉～7世紀初頭と7世紀前葉の2時期に分けられる。両時期ともいくつかの建物がまとまる単位が認められるが、単位を越えて建物の方向が共通していることから、全体として規則的な集落形態を呈している。6世紀後葉～7世紀前葉の建物と、6世紀後葉の竪穴住居の配置を重ねてみると、重複したり、掘立柱建物の単位と大きくずれて竪穴住居が存在していたりする。また竪穴住居の配置には掘立柱建物のような規則性はうかがわれないことからも、基本的には竪穴住居と掘立柱建物は分離されると考えられる。掘立柱建物のまとまる単位は、50m×60mほどの方形の範囲が想定される。弥生時代から中世にかけての遺構が多数重複しているため、掘立柱建物の数や種類の同定については

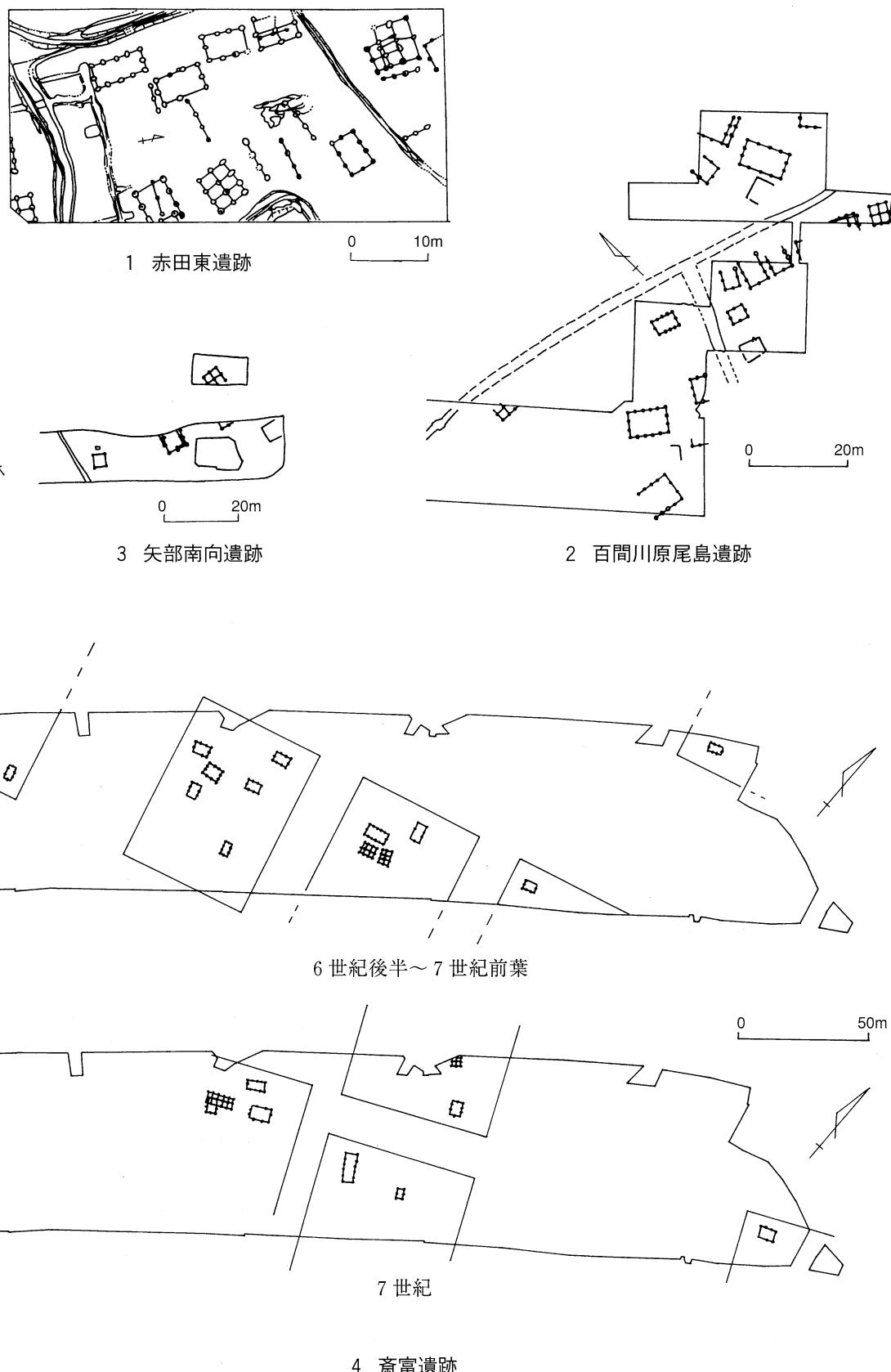


図269 7世紀前葉の集落

ある程度の幅を持たせて考えなければならないが、1単位は大体6棟前後以下の掘立柱建物で構成される。そして総柱建物を持つ単位もかなりあり、各単位にそれぞれ総柱建物が付属していた可能性が推測される。集落内や付近から鉄滓が出土しており、鉄・鉄器生産が行われていたと考えられる。

矢部南向遺跡（図269－3）（江見ほか1995）

倉敷市矢部の足守川中流域の平野部に位置し、旧国単位では備中国に属する。弥生時代後期後半の遺構や遺物の密度は高く、周辺地域の中心的な集落であったと考えられている。6世紀末～7世紀前葉の掘立柱建物が検出されている。掘立柱建物は2時期に分けられるが、いずれも2棟以上の側柱建物と1棟以上の総柱建物及び建物方向と方位を合わせた溝が検出されている。おそらく数棟の建物が溝によって区画されているといった景観であったと推測される。また柱穴は認められないが、床面に炉状遺構が認められる工房的な堅穴住居状遺構も伴っており、集落内で鉄・鉄器生産が行われていたと考えられる。

7世紀前葉の集落は、堅穴住居主体から掘立柱建物主体へ変化しているものが顕著となる。しかも建物相互には方位を合わせて並ぶ規則性が看取され、斎富遺跡のように集落全体の建物にも一貫した方向性が認められる例もある。また、建物数棟がまとまって方形の溝で区画されたものもある。さらに建物数棟がまとまる単位のなかには、総柱建物が含まれることが多い。

7. 7世紀における集落の画期

5世紀～7世紀前葉にかけての集落の様相を整理してきた。集落の変遷の画期をより鮮明にするために、8世紀の集落の様相について触れておきたい。当地における8世紀の集落は調査例も蓄積されてきており、ある程度は集落形態を復原することができる。基本的に掘立柱建物で構成されており、付属的に堅穴住居状の建物が認められる場合があるが、その例は極めて少ない。集落の最小単位は側柱建物2棟と総柱建物1棟で構成され、それらの配置は相互に平行であったり、直交してL字形になったりしており規則的といえる。側柱建物2棟の総床面積は大体60m²前後で、総柱建物の床面積は15m²前後である。集落の最小単位のなかには側柱建物が3棟の場合もあるが、その場合、総柱建物の床面積も増える傾向が認められることから、両者の床面積には規則的な関係があったことがうかがわれる。また、側柱建物1棟に総柱建物1棟で構成される単位もあるが、その場合でも側柱建物の床面積は60m²前後となり、側柱建物2棟の総床面積と近い。こういった側柱建物と総柱建物がセットになる単位は、複数の単位が集積した集落でも認めることができることから、単独で存在する集落の特異な形態でなく、該期の集落の最小単位の一般的な形態であるといえる。しかし、そのような集落の最小単位に倉庫と考えられる総柱建物が付属することや、建物の配置や両者の床面積に規則性が認められるのは8世紀の集落だけである。そのため、このような集落形態は律令的集落と呼称できる。そうすると、集落の最小単位に付属する倉庫については余剰物の保管といった意味ではなく、各単位に課せられた貢納物の保管という意味が強いと考えられた。つまり8世紀の集落は課税の対象として編成されたものと考えられる（草原2004）。

このような8世紀における集落のあり方は、7世紀の集落においても認めることができる。まず

倉庫についてみると、5世紀～7世紀初頭の竪穴住居が主体の集落においては基本的に認められない。岡山市の百間川兼基遺跡では、5世紀前半の総柱建物がまとまって検出されている(正岡ほか1982)。竪穴住居も検出されているが、総柱建物と重複していたり近接しすぎている。また総柱建物の数と比べると竪穴住居の数は少なすぎる。総柱建物群のみが存在していたと考えられる。6世紀中葉～後半の集落である真備町の阿知境遺跡では部分的な調査ではあるが、舌状の低丘陵の高所に竪穴住居があり総柱建物は斜面部にまとまっている(根木ほか1998)。これも竪穴住居と総柱建物が別々の空間を占地していることを示している。5世紀～7世紀初頭の集落例をみても、基本的には竪穴住居が主体、もしくは竪穴住居のみで集落が形成されている。このことから倉庫と考えられる総柱建物は別の地点にまとめて存在していたことが推測させられる。

7世紀前葉の掘立柱建物主体の集落をみると、数棟の側柱建物に総柱建物が1～2棟付属する。溝で区画された単位の大半を調査した赤田東遺跡の場合、3棟前後の側柱建物に1棟の総柱建物が認められる建物群が2つある。百間川原尾島遺跡の場合は、4～5棟の側柱建物に1棟の総柱建物が認められる。矢部南向遺跡でも数棟の側柱建物に総柱建物が1棟ある。斎富遺跡は遺構の重複がかなりあり、該期の建物全てを把握することは困難であるが、傾向としては総柱建物が1地点に集中するのではなく散在的であることから、数棟の側柱建物がまとまる単位に総柱建物が付属していた可能性が推測される。

つまり、竪穴住居主体の集落では総柱建物はどこか別の地点にまとまっているが、7世紀前葉の掘立柱建物主体の集落になると、集落内の各単位ごとに総柱建物が付属していくといえる。8世紀の集落と比べると1つの単位を構成する建物の数が多いものの、基本的な形態は共通している。単位内の建物配置も相互に規則的であり、これも8世紀の集落と共通する。8世紀における集落の基本形態は、7世紀前葉に形成されていたといえる。

8. 画期の背景

集落の変遷をみる限り、課税を目的として編成されている8世紀の集落の原形が、7世紀前葉に形成されていることがわかった。8世紀の集落は、7～8棟の建物で構成されている7世紀の集落の最小単位を3～4棟で構成される単位に細分したもので、7世紀前葉からの連続的な変化の延長線にあるといえる。また竪穴住居から掘立柱建物への変化については、斎富遺跡や百間川原尾島遺跡では両者が並存しているようにも考えられているが、遺構の分布を検討した結果、並存の可能性は少ない。竪穴住居から掘立柱建物への変化は、その外観の変化だけでなく、用いられた柱などの部材が広葉樹材から針葉樹材に変化している。掘立柱建物の柱材まで残存している例は少ないが、赤田東遺跡では残存していた2点とも針葉樹材であった(藤井2003)。広葉樹材は沖積平野に形成された集落の周辺でも獲得できるが、柱などの建築部材に用いるようなまとまった量の針葉樹材はある程度遠隔地からの供給が必要であり、地域を越えた供給システムが整備されていたことがうかがわれる。7世紀後半以降は古代寺院や官衙が各地につくられ、多くの針葉樹材が必要となってくるが(木沢2002)、その先駆的な供給システムは7世紀前葉の集落において形成されていた可能性が高い。

古墳の築成についても、当地においては7世紀前葉に変化が認められる。それは前方後円墳の消滅とリンクするが、巨石を用いた巨大な横穴式石室を有する古墳が認められなくなる。一方、石室全

長が3～5m前後の小型古墳については盛んに築かれており、県南部の後期古墳群を広範囲に調査した総社市の奥坂遺跡群(武田1999)や西団地内遺跡群(村上はか1991)の様相では、むしろ7世紀前半に築造のピークを迎える。県下における横穴式石室の発掘調査されたデータを集成しても、7世紀以降にも数多く築造されている。また6世紀後葉に造墓を開始した古墳群は、7世紀も造墓活動を続いている場合が多い。この様相が県下に数多く存在する後期古墳の一般的な様相と考えてよいとするならば、7世紀以降は巨大な古墳の造墓主体者は断絶したり、規模を大幅に縮小させるが、小型古墳の造墓主体者の変化はあまりなかったといえる。

古墳の造墓主体者と集落遺跡を直接対応させることは難しいが、6世紀後葉～7世紀にかけての小型古墳と、該期の集落の比較から検討してみたい。6世紀後葉の集落のうち、最も安定しているのは同じ地点で重複する竪穴住居が認められ、なおかつ2～3単位の竪穴住居群をまとめて溝で囲った単位によって構成されるV類の集落である。7世紀前葉における掘立柱建物主体の集落は、溝で区画された掘立柱建物群の集積で構成されており、区画内の建物群はさらに2～3単位に分けられる。V類の集落と7世紀における掘立柱建物主体の集落は、住居形式や住居の配置のあり方は異なっているが、基本的な構成は共通する。赤田東遺跡では、6世紀後葉の竪穴住居のまとまる単位が、7世紀前葉には整然とした掘立柱建物群へ変化しており、単位の位置もほぼ踏襲されている。竪穴住居主体の集落が、掘立柱建物主体の集落へそのまま移行した例といえる。6世紀後葉～7世紀にかけての小型古墳の造墓活動も継続的に行われていることから、竪穴住居のまとまる単位を溝で囲った単位と、掘立柱建物群を溝で区画した単位は、小型古墳の造墓主体者に対応する可能性が高いように思われる。V類の集落が認められるようになる6世紀後葉から後期古墳が爆発的に築かれ、しかも墳丘を接して連続して築かれている後期古墳群の景観は、V類の集落の景観とも対応するようみえる。竪穴住居1軒は、それが集落の基本的な単位である場合もあることから、血縁関係の最小単位である家族に対応すると考えられる。すると、竪穴住居群はいくつかの家族を合成した複合家族ということになる。V類の集落の基本単位とは、さらにそれを2～3単位まとめて溝で囲ったものである。これは、小型古墳を築造するための基本的な労働力に相当すると考えても矛盾しないと思われる。

6世紀後葉は、鉄鎌についても吉備独自の地域性が認められる(尾上1993)。このことを鉄・鉄器生産が在地の首長層に掌握されていたことの反映と解釈すると、重複のない竪穴住居の集積である6世紀後葉の窪木薬師遺跡は、鉄・鉄器生産をかなり集中して行っているものの、該期に巨石墳を築造し得るような有力な首長層に従属していた可能性が高いということになる。6世紀後葉の首長居館は当地域では未検出であり、実態としては不明であるが、該期には自立的で安定した集落と従属的で手工業生産を專業的に行う集落といった二者が並存していたということになる。實際には様々な集落形態があることから、両者の中間的な性格を持つ集落などもあったと考えられる。また鉄・鉄器生産についても、多量に生産を行っているものから、小規模な生産を行っているものまである。しかも岡山市吉野口遺跡のように、製鍊系鉄塊系遺物の小割りと精鍊鍛冶までの限定された工程のみを行っている集落もある(大道2001)ことから、鉄・鉄器生産への関わり方も多様であったことがうかがわれる。いずれにせよ6世紀後葉の集落は、自立的であれ、従属的であれ、5世紀前半からの集落形態の延長線上で理解されることから、基本的には在地の秩序によって存在していたといえる。

ところが7世紀前葉の集落は、最も安定的に発展した6世紀後葉の自立的集落と同様に、いくつかの住居がまとまった単位で構成されているものの、その形態は規則的であり、集落全体にもその規則性が貫徹されている。掘立柱建物をつくるための針葉樹材の確保には、遠隔地からの供給システムが必要であると考えられることからも、汎地域的な規定が存在したと考えられ、掘立柱建物主体の集落への変化は、集落外はもとより地域外の作用によって行われたといえる。7世紀における群集墳が極めて整然と造墓活動が行われていることから、戸籍的な意味を持ち、それが推古朝による規制を示しているという考えがある(水野1969)。これは、7世紀における当地域の集落の変化とも合致している。

古墳の規制は、既存の造墓集団に対してだけ行われたのではない。倉敷市菅生小学校裏山遺跡では製鉄に関係する炭窯とともに、7世紀前葉の古墳が2基築かれている(中野ほか1993)。また、総社市林崎遺跡では丘陵裾部に6世紀後葉以降の集落があり、背後の丘陵部には炭窯や製鉄炉と小型古墳が1基存在する(武田1999)。豊穴住居の床面には鍛冶炉を伴うものがあり、製錬と鍛冶を一体として行う作業が存在していたといえる。ただし、集落が形成されているのは丘陵裾部の狭小な河岸段丘上であり、それほど大きな集落は形成できない。そのため、古墳は7世紀代の小型古墳が1基だけということなのであろう。奥坂遺跡群や西団地遺跡群の場合、造墓活動が7世紀前半にピークを迎えることも、7世紀に造墓する集団が増加したことを示している。つまり、それは既存の自立的集落を規制のなかに取り込むと同時に、それまで古墳を築き得なかった、言い換えれば自立的でなかった集落も自立的な集落と同様のレベルに編成して取り込んだことを示している。菅生小学校裏山遺跡や林崎遺跡は、そのような集落に相当すると考えられる。県北部の久米町稼山遺跡群でも、多数の後期古墳と製鉄遺構が発掘調査されている。しかし、それらを統轄する有力豪族の墓域が認められないことが指摘されている(村上1980)。稼山遺跡群も7世紀以降の造墓が多い。このことは、県北部でも県南部と近い様相であったことを示している。自立的でない集落、言い換えれば従属的集落を畿内政権の規制に取り込むことは、その上位に存在した在地の首長層の基盤を崩すことである。そのため7世紀になると、6世紀後葉のような巨大な古墳を築けなくなった現象へつながると考えられる。

古墳時代における畿内政権と地方との関係は、鏡や甲冑の配布にみられるように、地方においてある程度の古墳を築くことのできる首長層との間で成立していた。中期中葉には一時的に下位層までその関係が及んでいたが(豊島2000)、後期における装飾付太刀の分布をみても(新納1983)、6世紀後葉まではある程度の階層までであった。ところが、7世紀における集落の変化や小型古墳の増加は、末端までに直接的な関係が成立してきたことを示している。

吉備地域においてそのような関係が成立したことの契機として想起されるのは、6世紀中葉～後葉にかけて行われた白猪屯倉の設定である。屯倉とは畿内政権の直轄地で、地方における政治的軍事的拠点とされる。そして屯倉には田地が伴うかどうか、またその田地は在地首長が提供するものと畿内政権自らが開発したものといったことをメルクマールとして、いくつかのタイプに分類できることが指摘されている(館野1978)。白猪屯倉は、吉備における鉄の生産地をおさえる目的で設定された(弥永1956)といわれてきたが、『日本書紀』の内容からは水田農耕に関する「田部」の編成についての記述しか見いだせないことや、屯倉の名称である「白猪」が農耕予祝祭につながるといったことから、畿内政権が直接行う田地の開発に関する屯倉であったとされる(狩野2001)。白猪屯倉

が、鉄生産に関わる屯倉といった見解の根拠は、美作国大庭郡に白猪臣がいることであり、美作国が古代において鉄生産が盛んであったことによっている。しかし、平城宮木簡から備前国邑久郡と同国児島郡にも白猪を名乗るもののが認められることから、白猪の名称は白猪屯倉を美作国に限定する根拠にはなり得ない。『日本書紀』の記述を素直に解釈すると、田地開発のための屯倉であったとすることが妥当と考えられる。

田地の開発は、各集落と身近に関わることであり、そのため屯倉が設定された地点やその周辺はもとより、屯倉を窓口として各集落と畿内政権との直接的な関係が成立しやすくなつたのではないか。欽明16年(555)～敏達12年(583)にかけて、白猪屯倉に関する記事が7ヶ所も認められるが、7世紀になると認められなくなる。このことは屯倉の経営が軌道に乗つたことを示唆しているとも考えられ、それが7世紀における吉備地域の集落の変化に反映されているのではないかと推測されるのである。

9. まとめ

5世紀～7世紀にかけての吉備地域における集落の変遷をみてきたが、6世紀後葉、もしくは7世紀初頭までは、在地における段階的な変遷によって理解できた。しかし、7世紀前葉に住居型式が竪穴住居から掘立柱建物主体へ変化するとともに、集落内部の建物全体が整然と配置されるようになった。これは課税を中心に編成されたと考えられる8世紀の集落の形態と基本的に共通することであり、内的変化の結果とは考えられない。畿内政権と直接的な関係が末端の集落へも及んだことを示しており、6世紀中葉～後葉に行われた白猪屯倉の設定が契機となった可能性が高いと推測した。このような集落は、かつて直木孝次郎氏が指摘した計画村落(直木1965)に通じるものである。

今回、他地域との比較は行えなかつたが、7世紀初頭を前後する時期に、集落変遷の上で画期があることが畿内の集落でも指摘されており(広瀬1989)、汎地域的な現象であることも推測される。このことは7世紀における集落変遷上の画期を、施策的な面以外からも説明する必要があることを示している。また、集落を構成する単位とした竪穴住居群や掘立柱建物群については、竪穴住居1軒が最小単位である集落であることから、これを血縁関係の最小単位である家族であったとすると、複数の家族を合成した複合家族ということになる⁽¹⁾。しかし、竪穴住居の大きさの差などの意味を含めた詳細な実態については追求できていない。集落研究の課題はまだまだ多くあり、より多角的な視点からの分析を行い検討していく必要がある。

註

- (1) 弥生時代後期になると同一位置で繁茂に拡張する住居が極めて多くなる。これは中期と比べ、単位集団が安定してきているといえる。ただし、竪穴住居を拡張する際は、そこの住人が別の住居に同居している場合もあったと考えられる。それは単位集団内における竪穴住居間の関係が緊密であったことを示している。一方5世紀以降の竪穴住居については、竪穴住居1軒が単位集団に相当する場合も認められる。また、竪穴住居を拡張する場合は少なく、重複していても別個に建て替えた結果であるといえる。これは住居を新たにする際に、ほかの住居に同居する必要を考えなくてよい。つまり、竪穴住居1軒の独立性が弥生時代と比べてかなり強かったといえる。したがって、5世紀以降に竪穴住居がまとまって1つの単位を形成しているものを、弥生時代の単位集団と同じ用語でまとめるのは不適切と考えられる。より実態に即した概念や用語が必要である。

引用文献

- 浅倉秀昭^{ほか}「矢部古墳群A」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82 1993年
浅倉秀昭^{ほか}「白溢古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117 1997年
石井克広「黒井峯遺跡発掘調査報告書」『子持村文化財調査報告』第11集 1990年
江見正己^{ほか}「矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 1995年
江見正己「弥生時代の集落変遷」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150 2000年
大道和人「古墳時代後期の製鉄の一様相」「韓国より渡り来て－古代国家の形成と渡来人－」滋賀県立安土城考古博物館 2001年
小郷利幸「正善庵遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第44集 1992年
尾上元規「古墳時代鉄鏃の地域性－長頸式鉄鏃出現以降の西日本と中心として－」『考古学研究』第40巻第1号 1993年
狩野 久「白猪屯倉の設備事情」『京都橘女子大学研究紀要』第二七号 2001年
亀山行雄^{ほか}「二子14号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81 1993年
亀山行雄^{ほか}「津寺遺跡」4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 1997年
河上邦彦^{ほか}「史跡・牧野古墳」『広陵町文化財調査報告』第1冊 1987年
木沢直子「古代における木材利用－ヒノキをめぐる考察－」『元興寺文化財研究所研究報告2001－増澤文武氏退職記念－』2002年
木下 亘^{ほか}『斑鳩藤ノ木古墳概報』吉川弘文館 1989年
草原孝典『三手向原遺跡』岡山市教育委員会 2001年
草原孝典「8世紀における集落の一類型」『古代文化』2004年
河本 清「狐塚遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第2集 1974年
柴田英樹^{ほか}「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138 1999年
島崎 東^{ほか}「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 1998年
下澤公明^{ほか}「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105 1996年
高畠知功^{ほか}「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11 1976年
武田恭彰^{ほか}「上竹西の坊遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69 1988年
武田恭彰「奥坂遺跡群 鬼ノ城ゴルフ俱楽部造成に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15 1999年
武田恭彰「奥坂遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15 1999年
館野和己「屯倉制の成立」『日本史研究』1978年 1~30頁
田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ 1966年
谷本 進^{ほか}『箕谷古墳群発掘調査報告書』八鹿町教育委員会 1987年
團 正雄「福吉丸山遺跡」『勝央町文化財調査報告』4 1993年
豊島直博「古墳時代中期の畿内における軍事組織の変革」『考古学雑誌』第85巻第2号 2000年
直木孝次郎「古代国家と村落－計画村落の視角から－」『ヒストリア』42 1965年
中野雅美^{ほか}「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81 1993年
中野雅美^{ほか}「津寺遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998年
中山俊紀「弥生集落」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社 1992年
新納 泉「装飾太刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号 1983年
西 弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原京発掘調査報告書』II 奈良国立文化財研究所 1978年
根木智宏^{ほか}「阿知境遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』135 1998年
畠中英二「陶邑T K 43号窯跡の年代観に関する再検討－出土陶硯からのアプローチ－」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』1999年
花田勝弘「吉備政権と鍛冶工房－古墳時代を中心に－」『考古学研究』第43巻第1号 1996年
平井 勝^{ほか}「百間川原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 1994年
平井 勝「岡山における弥生時代のムラとクニ (上)－投馬国から吉備国へ－」『古代吉備』第21集 1999年
平井 勝「岡山における弥生時代のムラとクニ (下)－投馬国から吉備国へ－」『古代吉備』第23集 2001年
廣瀬和雄「畿内の古代集落」『国立歴史民族博物館研究報告』第22号 1984年

- 弘田和司ほか「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150 2000年
 平岡正宏「大開古墳群大開遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第51集 1994年
 福田正継ほか「西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』109 1996年
 藤井裕之「赤田東遺跡から出土した木材の樹種について」『岡山市埋蔵文化財センター年報2 2001(平成13)年度』2003年
 藤原好二ほか「寒田窯跡群4号」『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告』第10集 2003年
 間壁忠彦ほか「金浜古墳」『倉敷考古館研究集報』第14号 1979年
 正岡睦夫ほか「百間川兼基遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 1982年
 正岡睦夫ほか「道口遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69 1988年
 松本和男ほか「富原西奥古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』83 1993年
 水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本5 近畿』角川書店 1969年
 村上幸雄「稼山遺跡群II」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1980年
 村上幸雄ほか「水島機械金属工業団地協同組合 西団地内遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9 1991年
 保田義治ほか「深田河内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第26集 1988年
 弥永貞三「大化以前の大土地所有」『日本古代社会経済史研究』岩波書店 1980年
 柳瀬昭彦「黒土窯・寒田窯跡〔広域営農団地能動整備事業(備南地区)に伴う発掘調査I)」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』31 1979年
 柳瀬昭彦ほか「原尾島遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 1996年
 山本悦世ほか「鹿田遺跡」I『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 1988年
 行田裕美「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第33集 1990年
 行田裕美ほか「大畠遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第47集 1993年

参考文献

- 宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告書』岡山県大原町教育委員会 1995年
 小郷利幸ほか「岡山市足守地域史研究(2) - 古墳時代後期 - 」『古代吉備』第16集 1994年
 神谷正義『西祖山方前遺跡・西祖橋本(御休幼稚園)遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1994年
 菊地芳明「東北地方の古墳時代集落 - その構造と特質 - 」『考古学研究』第47巻第4号 2001年
 甲元眞之「農耕集落」『岩波講座 日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店 1986年
 中野雅美「須恵器の編年・山陽」『古墳時代の研究』6 雄山閣 1991年
 西川 宏『吉備の国』学生社 1975年
 橋本博文「古墳時代の社会構造と組織」『現代の考古学6 村落と社会の考古学』浅倉書店 2001年
 光永真一「製鉄と鉄鍛冶」『吉備の考古学的研究(下)』山陽新聞社 1992年
 光永真一『吉備考古ライブリー10 たたら製鉄』吉備人出版 2003年

4 弥生時代中・後期の遺構

弥生時代前葉の遺物が溝17などから数点出土しているが、まとまって出土しているのは中期中葉の菰池式、高橋編年IVb期(高橋1980)に併行する時期からである。ただし当地における中期前葉から中葉の土器の変遷は、稚拙なクシ描文で、器壁も厚く、胎土にはやや大粒の砂粒が混じる段階(高田式)→流麗なクシ描文で、やや器壁が厚い感はあるものの、胎土も長石・石英に限定され、しかも細かい段階(南方式)→クシ描文とともに凹線文が認められるようになり、しかも器壁も薄くなっている。胴部下半や、高杯の脚部内面にヘラケズリが認められるものもでてくる段階(菰池式)に考えている。また、クシ描文の初源は、当地では前期における施文の発達が甕に偏重し、壺を中心とした中期とは異なることから、畿内地域にあったと考えられる。そのため、畿内との併行関係は先の編年観より新しくなり、菰池式は畿内第Ⅲ様式新段階併行と考えておきたい(藤田1992)。この時期の